

Walking in the "Dream"

Walking in the "Dream"

橋本コウ

豊島区道路管理課

プロローグ

私はレイチェル・ホワイト。出身はアメリカだけど、いまはわけあって日本に滞在している。あまり大きな声では言いたくないけど、傷心旅行の果てにたどり着いたのが日本なのよね。日本に来たのははじめてだけど、3.11でこの国のことをたくさん知ることができたわ。私の国が数億ドルもお金をかけて制作する映画のワンシーンのようだったけど、そこにいる人や動物たちは、役者やエキストラじゃなくて本当に生きてる人たちだというのが信じられなかった。TokyoやOsakaは今までも知る機会が多かったけど、Fukushimaなんて、私が普通に暮らしていれば知りえなかった場所に違いないわ。何はともあれ、いま私は世界が注目した日本にいる。

サイドライトで仄暗くしたホテルの窓から見下ろす東京の街が美しい。色とりどりの輝く蝶たちが舞うように、東京の光は輝き、沈み、また別のところで輝きはじめ、ランダムな点滅を繰り返している。

私は人々が寝静まった深夜に生きる人間だ。昼夜が逆転しているわけではない。夜になれば眠くなるし、実際に眠りにつく。ただ、夜の意識のありようが他人とは異なるのだ。日本には「獺」という空想上の動物がいることをGoogleで調べて知った。私は獺のように他人の夢の中に入り込み、そこで生きられる能力を持っている。

私の能力について少しだけ語っておく。生まれつきのもものではなかった。というより、この能力が使えるようになったのは、ほんの数年前の話だ。当時の私には心から愛する人がいたが、その人を私のものにすることはできなかった。会いたいという焦がれる気持ちと、会えないという憂鬱な気持ちの板ばさみで心に限界がきたとき、私は夢の世界に逃げ込んだ。眠りにつく前にこれから見たい夢をイメージするだけで、私の願望が叶えられるようになった。はじめに身につけたのは、夢のコントロールだった。

私はリアル世界では叶わないだろうことを、夢の中ではいとも簡単に叶えることができた。愛する彼を私のものにすることができたし、息子を授かることもできた。私の夢は今日、明日、明後日と連続的につづくから、夢の中にリアルとは違うパラレルワールドがあった。でもある日突然、奇妙な現象が起こりはじめた。

あまり会えない彼と久々に夕食をいっしょにしたときのことだ。彼が大好きなカルボナーラをひとくち食べてワインで一瞬の静寂をつくったあと、彼が唐突に話し始めた。

「毎晩、君が僕の夢に出てくる。そこでの君は積極的で、うちの家庭の深くまで入ってくるんだ。一晩一晩がまるでリアルな毎日のように、日常的に進むんだ。やがて僕は君と結婚して、そして子供が生まれた。もちろん僕は夢の中では妻とは別れて君といっしょになってるんだけど、僕はこの夢の中の世界が怖くなってきた。僕が見ている夢じゃなくて、君が僕の夢に入ってきて、夢の中の事実を作り出しているんじゃないかって思うようになった」

彼はそう言うと、ひとくち、ふたくちとワインを口にす。今度の静寂は一瞬ではなかった。私にとっては、彼が口にすワイングラスが永遠に彼の口から離れない気がした。

私は自分の夢を操る能力ではなく、彼がこの話をしたことに傷ついていた。要するに彼は、私

が彼の家庭を壊すことを恐れているのだ。私の中の時間が動きだし、ワイングラスは彼の口から離れる。ワインは光の加減で群青色に染まり、私の心に色を混ぜ、そしてどす黒い紅に染まった。私は何も言わず、レストランを後にした。

いまでもあの感触が忘れられない。幼い抵抗、恐怖に満ちた表情、形あるものが壊れる鈍い手触り、すっと刺さりすぎる脆い生物、悲鳴、真赤な血、動かなくなった人間。子供を置いて逃げようとする母親、逃走、パニック、鬼に追いつかれたときの笑いのようにも見える引きつった顔、そして再び刺さる感覚、深くいくつかの膜を破る手応え、赤く染まった私の指と手と体が、さらにマットに濃くなっていく。ひとり残された男は身動きひとつとれず、泣くこともできず、白と赤のコントラストが鮮やかなカーペットの色合いを邪魔するような青で不調和を場に提供していた。

私は殺人罪を犯した。でも捕まることはなかった。誰かから咎められることもなかった。そう、もちろんこれは夢の中での話。彼からは何の連絡もなく、私にはもう関わらないという意味を弱々しく物語っていた。どこでもない世界に私が旅立つ日、彼の家に向かいから見ていると、ちょうど家族みんなが玄関から出てきたところだった。その日は日曜日。教会にでも行くのだろう。彼の奥さんと子供は何も知らずにいまの幸せを生きているように見えた。彼も何も知らないふりをしていまの幸せを生きていきたいように見えた。ふと彼がこちらを振り向いたとき、彼の表情から笑みが消えたので、私は彼のかわりに微笑をたたえてあげた。すべてを知っているような澄みきった青空に、赤い舌打ちをして、私はアメリカを去った。

日本の男の子たちは夢見がちでおもしろい。毎晩、飽きない物語を私に提供してくれる。彼らのほとんどは好きな異性と遊ぶか、さらにその先の性的な部分まで踏み込んでいることが多い。だけど、こういう夢はどの国でも共通して見られている夢だ。日本人が特徴的だと思うのは、夢に出てくる異性が友達とかではなくて、アニメやゲームのキャラクターだったりすることだ。夢を見ている張本人は女の子と出会えて狂気のように喜んでいたり、私にはわからないネタ（きっと女の子が出ているアニメのネタだろう）を駆使して女の子を口説いたりしている。はたから見ている私にとっては、いかに彼らが不釣り合いなのかが分かるが、彼にはそれが分からず、必死になって少しでもこの瞬間を伸ばそうと努力しているのが微笑ましい。女の子の方もリアル的女性とは違い、彼の夢の中でデフォルメされた感情を強制的に持たされていて、ある程度彼の言いなりになってしまっている。「夢の中なんだから、せめていい思いをしてもいいじゃないか」と思われるかもしれないが、私は男が女を好きに操れると勘違いしている面を見るのは嫌いだ。ただ、あまりに夢が現実ばなれしているから、もろもろの評価を総合的にみると、結果微笑ましく感じてしまう。あと数分後には枕元で今か今かと待機している目覚まし時計が叫びはじめる。がんばれ、少年よ。もう少しで彼女はシンデレラのように12時の檻の中に閉じ込められてしまうぞ。私は時間を見計らって、12時を指す時計が描かれた黒のカーテンを彼らの間に引き入れた。

「おしまい」

彼の残念そうなかわいい顔を見る前に、彼はリアル世界へとフェードアウトしていった。

夢の中では、夢の中にいる張本人はかなりの確率で自分の好きな状況を作れるようだ。これは私の場合も基本的にはいっしょだが、確率の面でいえば私はほぼ100%思い通りに操れる。自分の夢も、他人の夢も。先ほどの男の子の夢を演出した黒のカーテンも、私が夢の中で意識的にしたことだ。もちろん現実の世界では私にそんな能力はないが、夢の中では世界中の人気マジシャンを圧倒的に凌駕できるテクニックを持っている。たとえばデートをしている男女に地球から月まで伸びている虹色に輝く道を歩かせたり、男女の営みをしている二人を日本から遠く離れた古代ギリシャのパルテノン神殿の真ん中にあるベッドに飛ばしたりできる。夢中になっている二人は世界が変わったことにほとんど気づかないのがつまらないけど、はたから見ているとすごく幸せな光景だ。月に伸びるレインボーロードとか、神聖なパルテノン神殿にあるベッドとか、絶対に不可能なロマンティックシーンを与えてあげているのだから、感謝されたいのが本音だ。恋は盲目なのよね。

私に黒のカーテンを降ろされた悲しい男の子が玄関からパンをかじりながら飛び出してきた。せっかく早起きしたのに、結局はギリギリの時間までのんびりとしていたようだ。駅までの坂道を小走りにかけていくが、ワイシャツがスーツからはみ出して、爽やかな春の風にひらひらと揺らされている。昨夜の夢の相手からして、まだ子供だとばかり思っていたけど、どつやら立派（

かどうかは分からないけど)な社会人のようだ。いまはリアル世界だから、私のスキルは活かされない。空を飛んで彼を尾行することもできないし、彼の足を泥沼を歩くようなスローペースにさせることもできない。でも、現実路線を取ることはできるから、私はちょうど通りかかったタクシーを止め、颯爽と車内に入り込んだ。

「駅までよろしくね」

覚えかけの日本語をたどたどしく運転手に伝える。夢の中では言語がないから楽なのに、現実では私も日本語を勉強して、郷に従えよろしく、この国の言葉を話さないといけない。自分の意思で来たからヤラサレ感はなく、いまのところ楽しみながら学習できている。

彼は運動が得意なのか、まだそれなりのスピードで走っていた。とはいえ、車の速度はそんな彼の10倍くらいは速いので、あっという間に彼に追いつき、抜いていった。リアガラスから彼にハート型のウイंकを送るが、瞬きよりも早く彼の姿は仔犬のように小さくなり、私の悪戯は彼に届くことはない。通学と通勤の人々でごったがえる賑やかな駅についた私は一番高い切符を買って、風に揺れるワイシャツを探す。こんなにたくさん人がいる中で、他人の服装のだらしなさをかわいいと思っているのは、きっと私だけに違いない。日本人の興味低さは興味深いことだ。

餌に群れるアリのように電車内は混雑していた。私と男の子を含め、もう一生のうちに会うこともないたくさんの知らない人たちが、まるで収容所に連れられていく錯覚を覚えた。いろんな表情があり、疲れきった顔をしている中年の男性、露骨に嫌そうにしている若い女の子、拭ってもまた流れてくる汗を何度も拭っている太った男の子、狭い中で必死に携帯電話のメールを打つ女子高生、中には立ったまま眠っている人もいる。友達同士で乗っているふたり組の表情が笑っていることだけが、この電車が収容所に行くわけではないことをかろうじて物語っている。

私が観察している男の子はドア側で窓の外を眺めていた。でもきっと眺めているわけではない。中にいる数十人に寄りかかれ、文字が欠けてはならない大切な印鑑のようにドアに押し付けられていた。他の場所なら喧嘩になるような状況でも電車の中だけは許されるのが理解不能だが、暗黙のルールになっているのか誰もこの状況に異を唱えない。

日本の女の子はかわいい子が多い。電車内を見渡しても、人ごみに潰されそうになって辛そうな顔をしてはいるが、基本的にかわいい。彼もアニメのキャラじゃなくて、ここにいるようなりアルの女の子に恋愛をすればいいのになと母親のような気持ちで心配してしまう。彼の後ろに立っている小柄の女の子も彼にぴったりと押し付けられているけど、彼はどういう気持ちでその状況を感じているのだろうか。私は前後左右から押されて身動きがとれない体で彼のことを考えた。極限状況下のため治外法権のように許されたこの空間は、痴漢の温床にならない限り、私は楽しんでいた。隣の男性の口臭と、前の中年の体臭を除いて。

彼は上野駅で降りた。上野駅はターミナル駅で多くの乗り換えの沿線があったが、彼はそのまま駅の外に歩き出した。

ところで、彼のことを彼と呼んだり、男の子と呼んだり、まだ彼の名前を知らない私にとって彼を表現することがやりづらい。だから私は彼に自分なりの名前をつけた。一郎、イチロー。彼がどのくらい偉大な人間かは知る由もないが、アメリカでも有名な野球選手の名前を彼に冠した。一郎、素敵な名前ね。

そんなことを考えているうちに、一郎は信号を渡って上野の街に出た。点滅している信号に気づいて急ぎ足で私も一郎の後を追った。

上野は楽しい。細い路地にたくさんの店が商店街のようにあり、洋服屋のとなりに居酒屋があったり、生臭いと思ったら魚屋があったり、いろんな種類の店が一緒くたになっている。海産物は早朝に市場で仕入れてきたのだろう、まだ8時半くらいなのにもう開店していて、道行く人々を店のスタッフが枯れた声で宣伝をしている。私もSUSHIが結構好きなので、並べられている新鮮な魚を見て、美味しそうと思える。人情的な生臭さを胸に吸い込み、一郎の10メートルくらい後をついていった。途中、道の頭上に看板がかかったいて「アメ横」と書かれていた。アメリカ？実際にはアメヤ横丁の略らしいが、そのとき私はそれを知らなかったから、「この街は全然アメリカじゃないよ」という勘違いを通りに置き去りにして、一郎が曲がった道を、私も曲がった。

アメ横のメイン通りを抜けると、通常（の基準はわからないけど、少なくとも服や魚が一緒に

は売っていない)の街並みがあった。デパートやビルが立ち並んでいて、私はアメ横に申し訳ない気持ちでホッとす。行き交う車のラッシュがすごい。通りの広さと交通量からすると日本の国道なのだろう。街のところどころにパンダのポスターがあるのはなぜだろう？ 上野に動物園でもあるのだろうか？ あるなら観光がてらに行ってみたいな。

一郎が銀色のビルに入っていく。7階だてのそんなに高くないビルだが近代的で新しい。大通りからビルのエントランスをのぞくと、エレベーターホールで一郎が年配の女性に挨拶をしているのが見えた。どうやらここが一郎の会社らしい。あんな変わった夢を見ながらも、一郎がちゃんとした会社で働いていることに安心した私は、近くの喫茶店に入って一休みする。

本名

「あなたとはいっしょになれないわ」青い髪の子は、淋しげだが冷たい瞳を彼から逸らしながら言った。

「そんなこと言うなよ。こうして毎日、僕は君に会いに来ている。それは、君のことが本当に好きだから」

目を逸らした女の子の前に身を乗り出し、一郎は自信のなさそうな表情で自信の強そうな言葉を吐いた。

「君はあの弱そうな男が好きなのか？ あいつは君の何を守ってあげられるんだ！ いつも状況から逃げ、自分からも逃げてるじゃないか！」

男の嫉妬は見苦しい。ライバルの男の子を落として自分を上にしようとする考えは、子供じみた下種な考えだ。

「あなたに彼の何がわかるの？ 会ったこともなくせに。彼の表面しかわからずに彼の弱い面だけを見ないで！」

女の子はさっきよりもさらに冷たい（というよりもキツと怒りさえ感じられる）瞳になった。「彼はもう逃げないわ。過去のある状況では確かに逃げてたかもしれない。でも、いまはもう逃げない。それに・・・」

「それになんだよ！」

女の子は優しい瞳に戻り、少し頬を赤らめて、ひとりごとのように「彼のつくってくれるお味噌汁は美味しいから」と呟いた。

私には何のことかわからないが、男の子が料理の上手な女の子にキュンとくるように、女の子もまたそういう男の子に恋心を芽生えさせる場合もあるのだろう。もちろんそれは一端であって、それが全てではないことは、女の子の言葉からも伺えたが。

一郎が何かまた子供のような言葉を言い返すと思って見ていたが、彼は肩を落として意気消沈していた。女の子のセリフで、どうやら雌雄を決したようだ。

「信一さん、ごめんなさい」

女の子は俯いて仔猫のような声で囁いた。そんな声を出してはいけない。自分に都合のよい夢をつくりやすい一郎（いや、どうやら信一という名前らしい）にとっては、恋の結末は思い通りにできなかったけど、いまの女の子の声は信一が作り出した精一杯の願望だ。まだまだ隙を見て信一は、この女の子を自分の世界に引きずり出してくるだろう。私は信一の将来のためにも一役買っておかなければならない。

「なーんて、甘く余韻の残るようなセリフを私が言うわけじゃない。あんたバカア？ あんたみたいな、女の子を触ったこともない男の相手するわけじゃない！」

そして女の子はひとりふたりと増殖して信一のまわりを感情ゼロの表情で取り囲んだ。やがて全員が風船のように破裂し、信一だけが世界に取り残された。

浅くて軽い眠りから覚めた私は、コップに残っていたアイスコーヒーを口に注いだ。氷がとけ

て薄くなっているが、ほろ苦い味はまだ残っている。一郎改めて信一もまた、ほろ苦い思いで目覚め、上司にドヤされているに違いない。入社早々に寝るなんて信じられないわ。私はマルボロに火をつけ、白い煙を天井に向けてくゆらせた。煙は行く当てもなくさまよい、そして消失した

。

動物園

神様はよくもこんな不思議な動物を作り出したものだ。自然の中にカムフラージュされるわけでもなく、白地に黒でメイクされているだけ。パンダのかわいさが、敵を油断させる効果があるのかどうかはわからないが、少なくとも人間の目にはとてもかわいらしく映る。あぐらのようにゆったりと座り、背中を丸めて笹の葉を食べる姿を見ると微笑ましい気持ちになれた。

思えばアメリカではつらいことがあった。自分の不幸な袋小路が見え、夢の中ではあるけど人を殺めた。私はその罪悪感からはきっと逃れることができない。実際の罪ではなく、永遠に自分の中だけに残る罪だから、

他人の夢の中に入ることで、どうやら私は心から癒されていたようだ。それはそうだ。人の妄想ってこんなにすごいのか、って半分は呆れて、半分は楽しんだ。私の軽い悪戯に翻弄されるかわいい男の子たち。本人たちには申し訳ないけど、いろんな人たちに会えて、いろんな人たちを知れて、私も成長できたと思う。心から感謝したい。

一匹の子パンダが自分の分の笹の葉を食べ終えたが、食べ足りないのか、他の子パンダに歩みよって行った。エサを取られそうになったパンダは「やめろよ」といった感じで奪おうとするパンダを小突いている。きっと人間にとってはこの小突きだけでも相当痛いんだろうなと想像できるが、子パンダたちのやり取りはやっぱりかわいい。近くにいた幼い女の子が、

「ママ！ あのパンダさん、あのパンダさんと遊んでるね」と、二匹のパンダたちを指差してキヤアキヤア笑っている。私と同じパンダたちをチェックしていたんだな。ママと子供という図式は、私につかの間の片頭痛を呼び起こしたが、それもすぐに治まった。こういう家族像はごく普通の当たり前の光景なんだと思った。

動物園では他にも猿山を見たり、キリンやゾウ、シマウマなど、いろんな動物を見た。爬虫類館ではトカゲやヘビなどがいて気持ち悪かったけど、正午までの間、私は暇を弄ぶことなく、時間を過ごすことができた。

ランチ

上野の交通量はあいかわらず多いままだ。イラストのパンダのポスターに朝よりも愛着を持った。歩道には午前中の仕事を終え、おそらくランチに出かけるであろう人々が溢れ出てきていた。この街は食事する場所が多そうだ。こんなにたくさんの人々がいても、厨房のキャパオーバーになることはないだろう。

私は信一が働いているビルから少し外れたところから通りを行く人々を眺めていた。ときおり信一のいるビルを観察しながら。ビルからも徐々に人々が出始めている。午前中の仕事のひとまずの完成を祈る儀式のように、空に大きく伸びをして上体を反らしている。同じグループでランチに行くのだろう、先頭に行く年配の男性（おそらく上司だろう）を囲むように数人の男性が付いていく。この中に信一はいなかった。

数分後に信一がニコニコしながら出てきた。意外にも女性といっしょにいる。30代くらいの女性と、20代と思しき女の子と、三人で並んでこちらに向かってくる。私とすれ違うとき、信一が「パスタにしましょうよ」とお店の提案をしている声が聞こえてきた。30代の女性は「そうね、久々のイタリアンね」と提案に乗る。20代の女の子も異論はないようだ。

いまの会話から察するに、グループの中では30代の女性が先輩で、信一と20代の女の子が後輩、信一もおそらくは20代。私の歳下。私は33歳だもの。

私は三人組のあとを追った。信一が話の中心にいて、女性二人を笑わせている。夢の内容はあくまで彼の趣味なのかもしれない。ちゃんとした社交性を持つてるではないか。お目当てのパスタ屋に近づくと信一が先に駆け出し、店内を見てOKサインを出した。レディーファースト文化の私にとって、彼の腰の軽さは心地良い。二人の女性の背後に隠れ、私も信一に見えないOKサインを送った。

NorthKitchenという名の店の中には大ききの違う丸テーブルが5つとカウンターがあるだけだった。白を基調にデザインされた雰囲気が清潔で、壁にかけられている絵画といい、店主の趣味の良さを物語っている。この前食べたパスタ屋は日本のチェーン店らしく画一的なデザインでいまいちだったから、今回は否応なしに期待してしまう。店内が狭いので私が目立ってしまうが、信一たちの会話も聞きやすい。

先に店に入った彼らに女性がオーダーをとっている。厨房では男性がフライパンでパスタのソースづくりに勤しんでいる。私は勝手にこの男性と女性を夫婦だと思うことにした。こじんまりとしているものの自分たちの店を持ち、趣味を活かしたインテリアの感じの良さは固定客も多そうだ。あとはお味だけど、それはこれからのお楽しみ。

信一たちのオーダーを厨房の夫に伝え、奥さんはお冷をもって私の席に近づいてきた。肩くらいまである髪の毛を後ろに束ね、モスグリーンのエプロンをしている彼女の動きにはそつがない。30歳前後だろうか、私と歳が近そうなのにさらに親近感を覚えた。

私は眺めていたメニューを閉じて、彼女のオススメを聞こうと思った。日本語でうまく表現するのは難しそうだったので、

「あなたが好きなパスタをください」と伝えた。たぶん大体の意味するところは理解してもらえ
るだろう。彼女は一瞬考えているように見えたが、すぐになっこりと微笑んで、

「それでは明太子のクリームソースはいかがですか？ スープスパゲティです」

彼女は迷うことなくオススメメニューを口にした。夫婦で余程研究したのだろう、遠慮がちだ
か強い口調だった。私は明太子が何かわからなかったが「OK!」と二つ返事でそれを注文した。
彼女は学校の授業で答えを当てた子供のように無邪気な笑顔を送ってくる。

「かしこまりました」

きっと彼女を見た男性は、旦那さんを羨ましく思うだろう。美人というタイプではないが、顔
のつくりや振る舞い、話し方が何ともかわいらしい。オーダーを伝える彼女の後姿を私は目を細
めて見つめていた。

「うまっ！ やっぱこの店は牡蠣のトマトソースですよ、カルボやアンチョビもおいしいですけど
、やっぱり牡蠣ですってば！」

信一はパスタを巻いたフォークの先に牡蠣を刺して、それを一口で食べながら、いかに自分の
選択が正しかったかを女性二人にアピールしている。信一のおちゃらけはよくあるのだろう
、30代の女性は苦笑いを浮かべ、20代の女の子は信一が食べる姿をニコニコしながら眺めている
。そのやりとりを見ながら朗らかに会話している夫婦。信一の声がうるさいが、店内に温もりが
広がる。

私の明太子クリームソーススパゲティがテーブルに届けられた。クリームソースに明太子とや
らの卵が溶け出しサーモンピンクの色をした綺麗なスープスパゲティだ。明太子以外にもムール
貝やアサリ、イカなどの海の幸が盛りだくさんで、奥さんのオススメを教わって良かったと思
った。

パスタをスープにからめて口に入れると、甘くてさっぱりとした海の味が口内に広がった。美
味しい。後味にちょっとした辛味があって、クリームของ甘みを引き締めしてくれる。この辛味はな
んだらうと疑問を持ちながら、一口、また一口とパスタをすすめるうちに、気づけばスープだけ
が残っていた。ムール貝もアサリもきれいさっぱりと貝殻だけになっているが、食べたことを覚
えていない。美味しくいただいたから損はしていないが、無意識に貝を食べてしまったのはもっ
たいなかった。また次の機会にしようと、NorthKitchenの名を胸に刻んだ。

信一たちは食後のコーヒーを飲みながら、仕事外の話をしている。ネットで見つけたおもしろ
いコンテンツの話や、女の子が飼っている犬の話。信一と女性二人で、一対一くらいの割合で話
している。私は再び、信一の社交性を見直した。やっぱり夢はただの願望に過ぎず、アニメキャ
ラに恋をしているわけではないのかもしれない。私のこんな内なる声が導きだした流れなのか、
会話は方向転換していった。

「信一くん、なんで彼女できないんだろうね？ 不思議でしょうがないよ」

30代の女性が微笑を帯びた真顔で言葉を口にした。ひとりごとのようにも聞こえる声で。

「ホントですよねー、信一先輩、何年も彼女いないんですってー、信じらんないですよねー、

マコ、立候補しちやおうかなー」

20代の女の子はマコという名前なのか。ケラケラといたずらっ子の表情をしている。

信一の社交性が瞬間凍りついた。反射的に会話を返していた今までよりも少し間をおいて、「まー、別にいいじゃない。晩婚型なんだよ、僕は」

「ふーん」マコはつまらなそうに口を尖らせた。

「まっ、またサエ姉さんがかわいい女の子を信一氏に紹介してあげよう。だから気を落とすな、信ちゃん」

30代の女性（サエというのか）が信一の肩を叩くと、マコはまたケラケラと笑い出す。右の唇の端から見える八重歯がかわいらしい。信一、まわりにいるかわいい子にどうして気づかない。

Oh , Why can't he know pretty girl ... Aha !

私は即興でつくった歌を口ずさむ。ポップに。信一たち三人組がこちらを見ているのに気づかないふりをして、私は伝票を手にして立ち上がった。パスタの皿にはムール貝とアサリの貝殻が、信一たちと同じように並んでいた。

悪夢

私は森の中を歩いていた。深い森で木漏れ日はほとんどなく、あたりは霧がかった灰色の空気をまとい、緑色が滲んで重々しい。鬱蒼としている木々の濃い匂いが、鳥たちの鳴き声の邪魔をする。

私は裸足のまま、白いワンピースで歩いていた。爪だけが赤い白い足に、森の透明な雫がうっすらと表面を覆っていて冷たい。

森を流れる細い小川がせせらぐ。この暗い森の中にある川は、太腿にある静脈のようにひっそりと流れ、緑に必要な水分を森全体に送り込んでいるようだ。

私は小川に両足を入れ、泥を洗い流した。どうせ裸足だからすぐに泥だらけになってしまうが、手で潰してしまった虫の無邪気な体液のような感覚が嫌だった。

洗い終えてから、小川の横にあった人が乗れるくらいの大きさの石にのぼったところで、静かな視線を感じた。この森を濡らす雫のようなひっそりとした視線。私はゆっくりと後ろを振り返った。人影は木々に隠れてこちらを覗いていたが、私が振り返った瞬間、走り出した。森の深奥部へと向かって。

私は裸足のまま駆け出した。枝や小石が落ちている小道に、私は針で刺すような痛みを感じていたし、たぶん血も流れているに違いないのに、いまできるだけの全力疾走で私は追いかけた。自分の裸を見られたかのような、大切なものを覗かれた気がしてならなかった。さっきまで微かに聞こえていた小川の声は、いまはもう聞こえなかった。

前を走る人影が見えてきた。あまり大きくはない。男の子のようだ。男の子は倒木をまたぎ、岩場に乗り上がり、木々をかわしていたが、森の奥に進むにつれ障害物が増えてきたのだろう、逃げる速度が目に見えて遅くなってきた。男の子がこちらを振り返った。私はハッとした。元カレの息子だった。そう、私が夢の中で刺し殺した男の子だ。

男の子は後ろを見ていて足元に迫る倒木に気づかなかった。そして予想したとおり、木につまづき、前のめりに転んだ。子供によくある豪快な転び方、大人になるとめったに傷を負うことがなくなる手のひらと膝のすり傷ができそうな転び方だった。

男の子の進みが止まったので、私は自然に追いつく形となった。これが映画なら、男の子を引き寄せて、ついに顔を見るシーンなのだろうが、私はもうこの子が誰だか知っている。どうして良いかもわからず、男の子を見下ろすしかなかった。

木から雫が落ちるくらいの時間が過ぎた。男の子は起き上がって、服についた泥を払い、こちらを向いた。悔しいのか痛いのか、目には少しだけ涙をためていた。私は小指で涙を拭いてあげた。男の子の涙は生ぬるくて、舐めると微かな塩味がした。

「どうしてこんなところにいるの？」

私が訊ねると、男の子は袖で涙を拭いて俯いた。そして言いづらそうにポツポツと独り言のように呟いた。

「パパが行ってこいって」

私は男の子の言葉について考えた。パパが行かせた？

「ママは行っちゃダメって言ったけど、パパが行ってこいって言ったんだ、だから、僕はここに来たんだよ」

おどおどしていたと思ったのに、いつの間にかはっきりと話している。なぜか不貞腐れているように見えたが。

「パパはなんで行ってこいって言ったの？」おそらく答えなんか知らない男の子に訊ねた。

「わからないよ。それよりも痛いよ、お姉さん」

男の子は転んで怪我をした手のひらを突き出して私に見せてきた。指にも手のひらにもいくつかの傷がついていて、真っ赤になっている。転んだにしては異常な出血量だ。

「でもね、手はそんなに痛くないんだよ」

男の子は手のひらで、着ていたキャラクターもののTシャツを真っ赤に塗り上げた。そしてTシャツをめくった。

「こっちが痛いんだよ、お姉さん」

男の子がめくりあげた先からは、赤い流血が森の雫の何百倍もの量で流れていた。お腹に開いた穴は黒くて深い井戸のようだった。私は井戸の中に飲み込まれ、どす黒い悪夢へと誘われていった。

井戸の底から這い上がろうとしたが、壁に組み込まれた石がぬめぬめして思うように上がれない。井戸の中は腐臭と血の臭いが混じった生臭さに満ちていた。遙か上空に見える光は硬貨くらいの大きさしかなく、この井戸の深さを浮き彫りにする。

これは夢に違いないのに、なぜか夢から覚められなかった。私は夢のコントロールには誰よりも自信があったが、今回の夢はいうことを聞いてくれない。私自身が誰かにコントロールされているかのように。夢と現実の狭間のリアリティが私を襲い、すべてを脱がそうとする。

私は脱がされそうになる白のワンピースを必死に押さえ、目を閉じてもう一度夢から覚めようと思った。こんなはずじゃない、夢を操るときに神様なんて登場したことなんてない。私は恐怖から涙を流し、何度も何度も神様に祈った。震える両手を合わせ、手の中に感じる生ぬるい液体をこすり合わせ、液体が乾燥するまで神様をお願いした。ここから出してください、と。

頬を伝う涙が乾き、私の顔に一筋の線が描かれたころ、私はゆっくりと目を開けた。目の前にロープが降ろされていた。ロープは上空の光に吸い込まれるように伸びていた。私はロープにすがり、壁を足の爪で押さえつけ、少しずつ井戸を上っていった。爪が剥がれる感覚があった。きっと私の足はマニキュアの赤よりも濃い紅色に染まってるだろう。

ワンピースが壁の石の間に引っかかり、破れる。構わずに上に向かって進んだとき、井戸の底に棲む魔物が私からすべてを剥ぎとった。下を見てはいけない、きっと地上に戻れなくなる。私ははだけた体のまま、井戸を上っていった。

井戸の縁に手をかけたとき、私の手を取る別の手があった。消耗しきった私が最後に見たのは、太陽の逆光で強い影に覆われた信一の心配そうな表情だった。モグラのように太陽の光で目が潰れそうだ。私は信一に地上に引き出され、そのまま気を失った。

白い天井が眼前いっぱい広がっていて夢の途中なのかと思ったが、視線の端に見えた光が私を現実に戻した。ダウンライトをつけっぱなしで眠っていたらしい。バスローブに包まれていることに安堵した。

私はキッチンに行き、冷蔵庫からボルビックを取り出し、ボトルのまま数口飲んだ。悪夢にうなされ喉がカラカラだった。水が喉から胃に流れ落ちる感触が新鮮を感じる。

リビングにある白のソファに座り、私はマルボロに火をつけて肺いっぱいに煙を満たす。夢のおさらいを数秒でしてから、煙を吐き出した。悪夢色を染み込ませたような紫色の煙が空間を漂う。煙は逡巡し、やがて天井に吸い込まれるように消えてなくなった。私の思考も同じように戸惑いを見せ、なかなか結論に至らない。

なぜ男の子が登場したのか？ なぜ夢をコントロールできなかったのか？ なぜ助けてくれたのが信一だったのか？

考えの循環に疲れ、私は考えるのをやめた。今夜はとにかく眠ろう。朝になったらまた考えればいい。

信一が手をつないでいるのは、たぶんマコだ。いや、たぶんではなく、絶対にマコだ。先日イタリアンで信一とランチを食べていた20代の、時折見せる八重歯がかわいい女の子。いまもその尖った歯を信一の横顔に向けている。小悪魔っぽい歯で信一の首に噛みつきそうだ。

この唐突な出来事はきっと夢の中にいるのだろう。何も考えずに眠りたかったのに、またこの世界に来ている自分自身に苦笑した。

それにしても、井戸の夢といい、自分の力が及ばない夢が多くなった。夢の力が弱くなってきたのだろうか。それならそれでもいいが、井戸の悪夢のように起きたくても起きれないような深い夢に悩まされるのは嫌だ。普通のことなのかもしれないけど。私は観察者として信一の夢の世界にまどろんだ。

信一がリアルな女の子の夢を見ていることが正直意外だった。いままで私が覗いていた夢では、必ず水色の髪の毛をした白い女の子が登場していたからだ。信一の願望が夢に具現化していると思って楽しんでいたのに、マコが出てくると夢の世界はそんなにおもしろくもない。夢とはいえ、信一ののろけ場面を堂々と見せられている感じが嫌だ。

信一たちは公園の中ほどにある噴水のまわりに円形に並んでいるベンチに腰掛けた。水しぶきが彼らの眼前に小さな虹をかける。マコが虹に気づいたのか、指をさして騒いでいる。信一はまぶしそうに空を見上げ、虹をつくった太陽を探している。

マコがバッグから布包を取り出した。薄緑色の生地には白のドット柄が入った、女の子らしいデザインだ。マコが何か話しながら包を開けると、弁当箱だった。信一は二ヶ月に一度くらいしか発売されない漫画の新作の最初のページをめくるように弁当箱の蓋を外した。「おおっ」という信一の驚嘆する声が聞こえた。マコは信一の横顔を見つめながら、卵焼きの形がおかしくなった言い訳をしている。憎らしい八重歯を折ってやりたい。私の感情を逆撫でするような信一のほ

め言葉に耳を塞いだくなった。形のおかしい卵焼きの味が自分のいちばん好きな甘さ加減だとか、肉じゃがが母親の味にそっくりで美味しいとか。公園の上をいくそよ風が、薄緑色の布をゆるやかにたたためかせていた。

信一たちは森の小道を歩いていった。いつの間にかふたりの手はつながれていて、ゆっくりとした歩調で木々の緑をすり抜けていく。コツコツと鳴る靴の音と同じテンポで私は彼らの20メートル後くらいを歩いていく。私はどうかしているのだろうか、信一なんて、成田から乗った電車の中で見つけた、よだれを垂らして寝ていただけの男なのに、なんでこんなに信一のことを気にしてるのだろう。

私は考えに思いを巡らし、うつむいて歩いていた。数秒後に足元に映るふたりの影を踏みそうになった。顔を上げると、八重歯がちょっと見えるくらいの微笑みを浮かべたマコが話しかけてきた。

「Could you take a picture？」

あろうことか、信一たちはスマートフォンを私に差し出し、写真撮影を要求してきた。感情的にならないように努力するのがつらかったが、私はにっこりと微笑むと、彼らからスマートフォンを受け取った。こちらがOKするかどうか分からないのに、すでにカメラモードになっていた。

信一たちは木の幹によりかかり、ふたりともピースサインをした。マコは自慢の八重歯がチラっと見えるくらいの笑み、信一は左の口角を上げてかっこつけている。私はシャッターを切った。パシャ。信一とマコが時間の流れの狭間に切り取られた。このままふたりが固まって、身動きがとれなくなればいいのにと思ったが、そうはならなかった。私は撮影した写真が思い通りの出来になっていることを確認した後、信一にカメラを渡した。そしてふたりを見つめた。彼らはプレゼントを開ける子供のように無邪気に画面を覗き込んだ。一瞬の静寂があった。

「何これー！」

予想通り、マコが叫び声を上げた。信一は画面を指でスライドさせて、写真の全体像を確認しているようだが、それがムダだと知ったのだろう、私に視線を移した。私が撮った写真は、彼らの首から下だけの写真だった。

「手元、ずれちゃいました？ もう一度お願いしていいですか？」

信一は間違いだと思ったのだろう、再び撮影のお願いをしてきた。私は無表情のまま信一を見つめ、彼の表情が変わらないことを確認したあと、頬を緩めて笑いかけた。

「間違いじゃないのよ。わざとそうしたの。彼女の八重歯が憎らしそうに出たから、カメラから外しちゃった。ごめんなさいね」

信一は私を睨んでから、マコに振り向いた。マコは何が起きたかわからないといったように惚けていたが、瞳は濡れていた。

「あなたにお願いしたのが間違いでした。もういいです」

信一はマコの頭をなでて、いまにも泣きそうなマコを慰めていた。ひどい人だね、マコの八重歯はかわいいよ、気にしちゃいけないよ。ひとつひとつの言葉がマコを元気づけると同じように、ひとつひとつの言葉が私の黒い炎を燃やしはじめた。

私は信一からスマートフォンを取り上げると、彼の顔を無理やりこちらに向かせ、彼の唇に私

の唇を合わせ、シャッターを切った。パシャ、パシャ、パシャ。マコにはきっとスローモーションのように、この3コマが見えているだう。一枚目は瞳を閉じて、二枚目は瞳を開けて、三枚目はカメラを向いて、私は自分自身をカメラに切り取らせた。すぐに消される運命の写真だけど、マコのメモリーには写真以上に鮮明に焼き付けられたに違いない。

「ごめんね、マコちゃん。きっとあなたより先にしちゃったかもね」

驚きで身動きがとれない信一に、もういちど深い口づけをしてから、私は彼らの前から離れていく。

「See You」

ふたりに右手を上げ、私は夢の世界からフェードアウトしていった。

この現実には、私だけがデジャブを感じているのだろう。雲ひとつない空の下、信一とマコは公園の噴水が作り出す虹を指差して、にこやかに会話をしている。水しぶきがはじいて気持ちがいいね、とマコが信一に話している。信一はうっすらと流れる汗を右手の甲で拭き、空を見上げた。信一の横顔を見つめるマコの微笑みも太陽に負けないくらい眩しかった。

マコはバッグから薄緑色のドット柄の弁当袋を取り出して、彼らのランチが始まった。私は信一が驚嘆の声を上げる前に自分の耳を両手でふさいだ。本音と偽りのまじった褒め合いややり取りを見ることに、どうしようもない程の嫌悪感を覚えてしまう。

音のない世界で、マコが食べさせてくれた卵焼きを頬張りながら、信一の口元は「オイシイ」と動いた。肉じゃがやウインナーを食べて信一が何が言うたびに、マコの八重歯が見え隠れする。マコは両膝を合わせて体育座りをする格好で、サンドイッチを頬張った。マコが空を見上げると、すべての陽光がスポットライトのようにマコに当てられた。その瞬間の信一とマコの姿が私の脳裏に映され、しばらくその残像が消えなかった。恋愛映画のポスターになりそうな、日常の中にある幸せ。タイトルは何がいいだろう。「彼女のたまごやき」「たまごやきに愛をこめて」「休日は公園で」「壊されたタマゴヤキ」「マコ殺人事件」。最後のタイトルは素敵かもしれない。いったい誰がこのポスターから殺人事件を想像するだろう。視聴者を180度裏切るすばらしいタイトルだ。

私は映画監督になった気持ちで、シナリオを描いていった。やっとふたりの残像が消えて、私の脳裏には自分がつくるストーリーが断片的に流れていった。

サンドイッチを地面に落としたマコは何が起きたかわからない惚けた顔で信一を見つめる。信一が微笑みながら落ちたサンドイッチを拾おうとする。サンドイッチに滴る赤い液体を、信一は最初、トマトがつぶれたのかなと思ったが、すぐにそうではないと分かった。赤いものは続けざまにサンドイッチに滴り落ちてくる。信一はマコを見上げる。そして気づく。マコの白いボーダーシャツにじわじわと広がる赤い円形の模様。ボーダーを横切る円が幾何学的だ。火薬の匂いが立ち込めてくる。私の手には銀色の小型の拳銃が握られていた。崩れ落ちるマコを信一が支え、マコの胸に薄緑色の弁当箱をかぶせてあげる。すぐに白いドット柄よりも大きな赤い斑点がつくられた。朦朧としながらもマコは口元に笑みをたたえ、体を支えてくれている信一の髪の毛を優しくなぞった。あまり口をあけられないのだろう、八重歯は見えなかった。ただ、マコの儂げな表情を私はかわいいと思ってしまった。そしてもう一度拳銃をマコに向けた。何の抵抗もなくトリガーが引かれ、銃弾が静かに弾き出された。私には銃弾が回転しているのが見えた。そしてゆっくりと、実際は一瞬のうちに、マコの額に吸い込まれていった。彼女のまぶたがピクリと瞬きを打った。そして遠くを見る目になって、彼女の腕がダラリと地球に落ちていった。ここでエンドロールだ。信一には何も語らせない。

私は脳内でイメージした短編映画の世界から戻ってきた。マコはふたつ目のサンドイッチを手

にしている。信一もサンドイッチをもらって、美味しいを連呼している。空を見上げると、先ほどまであれだけ猟奇的なシーンだったはずなのに、あいかわらず美しい青空が広がっていた。私はため息をついて、コンビニで買ってきたクロワッサンを口にした。空を横切る鳥たちを見ながら、ぼんやりとクロワッサンをブラックコーヒーで胃に流し込むが、どちらの味も感じられない。現実味のない現実が、私を縛っていた。なんであのままマコは死んでいないのだろう、なんでふたつ目のサンドイッチを信一と仲良く食べていなければならないのだろう。世の中って、こんなにうまくいくものなのだろうか。私はいつからこんなにネガティブになったのだろう。私の考えは行先のない袋小路を逡巡していた。

何か私に話しかける声が聞こえている。クロワッサンを食べ終わった記憶も、コーヒーを飲み終えた記憶もないが、私はただぼんやりと空を眺め続けていたようだ。

「Sorry, Could you take a picture？」

空から前に視線を移すと、はにかんだマコが私に向かっていて。そうだった、この後、私はふたりの写真撮影をするんだった。空想の映画ではなく、現実の姿。

「OK」

私は信一から黒いスマートフォンを受け取った。夢の中と同じように、最初からカメラモードになっていた。スクリーンには微かに信一の指紋がついていた。

ふたりは木の幹に寄りかかり、手を握ったまま空いてる方の手でピースサインを送ってきた。信一の照れ笑いと、マコの八重歯。私はふたりの表情をカメラの真ん中に入るようにシャッターを切った。パシャ。ふたりは瞬きすることもなく、私の構図どおりに良い写真になったと思う。スマートフォンを信一に返すと、彼らの楽しそうな声が聞こえてきた。「信一くん、なんか照れてるね」「マコ、かわいく撮れたね」「ひどーい、写真映りだけはいって言うつもり？」マコは信一の額に指を立てて意地悪な顔をした。

「お姉さんの写真も撮りましょうか？」

マコが唐突に私に話しかけてきた。私は思わずきょとんとしてしまった。マコの後ろから信一もそうしたらいいって表情で私を覗き込んでいる。私は信一を見つめ、それからマコを見つめ、無意識のうちに自分のデジカメを渡していた。この展開は全く想像していなかったのだから、私もつい親切心に乗ってってしまった。

「お願いするわ」

私もふたりと同じように木の幹に寄りかかった。私はニコリとするわけでもなく、噴水のあった方を流し目で眺めた。森の散歩道を親子連れが歩いていた。男の子が、何かにつまづいて転んだ。泣きそうになっている男の子を母親があやし、父親が抱き上げる。休日によく似合った光景が私の心に刺さってくる。

「はい、チーズ！」

パシャ。マコが陽気な掛け声とともに私を切り取った。父親に抱き上げられた男の子はすっかりご機嫌になって、キャツキャツと騒いでいる。

「さすが本物のブロンドは映えますね、なんか表情もミステリアスで、洋画のポスターのようで素敵」

マコが私にカメラを渡しながら、話してきた。すっかり日本語だけの会話になっている。私はところどころ知っている言葉をつなぎ合わせて、なんとかマコが言わんとしていることを理解した。そうね、ミステリアスに映ったかもしれないわね、さっきまであなたの殺害シーンを想像していたんだもの。私はカメラのディスプレイに映った私を見ながらマコの赤く塗られたボーダーシャツ姿を思い出していた。

信一も、私とマコの会話に混ざろうとこちらに歩いてくる。マコの肩越しにカメラを覗き込んだ。

「ホントにいい写真ですね。マコの腕じゃなくてモデルがいいんだろうな」

マコはむすっとした表情を浮かべたが、すぐになっこりとして私の目の前で八重歯を出した。信一がこちらを向いて訊ねてくる。

「お姉さん、どこかでお会いしませんでしたか？」

私は信一の瞳の奥底を見つめる。焦茶色の鏡に、無表情の私が映っていた。

「きっと、夢の中じゃないかしら？」

「え？」と聞き返した信一とマコに背中を見せ、私は公園の森の中を歩き出した。前にはさきほどの親子連れがゆっくりと木や鳥を見ながら、幸せそうに歩いていた。父親の肩にまたがっている男の子がこちらを振り向いて手を振ってくれた。私も男の子に手を振り返したら、満面の笑みを浮かべて、

「バイバーイ」

そろそろアメリカに帰ろう。

「バイバイ」

私は男の子に向かって唇を動かした。口の中に流れてきた涙がほろ苦かったが、私はそれを飲み込んだ。

機内のアナウンスがうるさくて私は目を覚ました。そろそろロスに着く頃だろうか。機内は真暗だった。飛行機が停電とかするのだろうか？早くライトがつくことを祈りながら、私は前方を見つめていた。

目が暗闇に慣れ始めたとき、男性の客が通路に倒れているのが見えた。CAは男性に気づいていないのだろうか。私は男性を起こしてあげようと思い、席を立った。

私が男性の方に一歩ずつ近づいていくと、男性は震えだした。

「来るな・・・」

親切心で男性を起こしてあげようとしたのにひどい言われようだ。私は少し傷ついたが、それでもかわいそうな男性に近づいたときだった。

私の手にはドロドロに汚れたナイフが握られていた。目を覚ましたときから生臭い気がしていたが、その正体はこれだったか。

後ろを振り返ると、キャンパスに真赤に描きなぐった抽象画のようなカーペットが見えた。そして、奥に男の子、手前に女性が倒れていた。ふたりの胸は血だらけになっていて、きっともう生きてはいないだろう。私がさっき刺し殺したのだから。

「ジョン、公園で息子をダッコできなかったね」

ジョンには何も語らせない。私はナイフをジョンの胸に突き立てた。ジョンに馬乗りになり、ナイフを抜き、もう一度胸の違う場所に突き刺した。そして同じ動作を何度も何度も繰り返す。

「信一、夢の中に逃げ込んでたのはあなたじゃなくて、私だったのね。いろいろバカにしてごめんね」

私は再び夢の中にまどろむ。

「See You」

Walking in the "Dream"

<http://p.booklog.jp/book/46457>

著者：橋本コウ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/koohashimoto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46457>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46457>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.